



lyrisme/lyricism のフランス語・英語間における差異について : 接尾辞isme/ism による造語作用をめぐって : Sur la différence entre le français et l'anglais du mot « lyrisme/lyricism »

廣田, 大地

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 50:43*-67*

(Issue Date)

2018-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010502>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010502>



lyrisme/lyricism のフランス語・英語間における 差異について

－接尾辞 isme/ism による造語作用をめぐって－ Sur la différence entre le français et l'anglais du mot « lyrisme/lyricism »

廣 田 大 地

目次

0. はじめに
1. 抒情と叙情
2. 称賛／批判としての「lyrisme」
3. 日本における移入：リリズムとリリズム
4. 「-ism(e)」と「-icism(e)」
5. 「stoïsme/stoïcisme」による例証
6. 接尾辞「-ism(e)」の造語作用
7. おわりに

0. はじめに

フランスにおける伝統的な詩的ジャンルである「抒情詩 (poésie lyrique)」についての研究は、1990 年代半ば以降、とりわけ 2 冊の論文集 (*Figures du sujet lyrique*, 1996 年 / *Le Sujet lyrique en question*, 1996 年) の刊行を契機に、今日に至るまで非常に活発に行われてきている。そのような研究においては、例えばボードレールやユゴーのような個別の詩人における抒情詩の特徴を主題とした論文も多いが、その一方、ジャン＝ミシェル・モルボワがその著書『抒情性について』(*du lyrisme*, 2000 年) で示しているような、作家や時代に限定されない普遍的な抒情詩の概念そのものを問題とする、ジャンル論としての抒情詩研究への関心も高まっている。

そのような抒情詩の本質をめぐる議論では、「抒情性 (lyrisme)」という語が用いられることが多いが、その点に関して注意しなければならないのは、この語が19世紀になって創出された比較的新しい造語 (néologisme) であり、20世紀になってジャンルとしての抒情詩への関心が高まったことで、この語が頻繁に用いられるようになったという経緯である。また、そもそも抒情詩というものが時代や場所、詩人や作品によってそのあり方が変化するものであるがゆえに、「抒情性」という語もまた一つの意味に固定し得るものではないという点にも気を付けなければならない。モルボワが前掲書において述べているように、「抒情性」とは「霧がかかった地帯 (zone brumeuse)」あるいは「あやふやな土地 (terrain vague)」に似たものなのである¹。

そのような「抒情性 (lyrisme)」という語が持つ本質的な意味上の不確定さは、フランス語での抒情詩研究の議論を日本に紹介していく際にも、とりわけ注意しなければならないが、日本語による議論のためにはそれだけではなく、日本語において用いられる「抒情性」あるいは「リズム／リリズム」という語独特の曖昧さや、フランス語の「lyrisme」とのニュアンスや文脈の違いを明らかにしておくことが最も重要な前提条件と言えるだろう。しかしながら、これまでの日本語によるフランス詩の紹介や研究において、「抒情性」あるいは「リズム／リリズム」という語は十分に吟味されることなく、安易に用いられてきてしまったように思われる。本論においては、今後フランスにおける「抒情詩」あるいは「抒情性」というものをより深く理解し、日本におけるフランス抒情詩研究をより豊かで精緻なものにしていくために、フランス語の「lyrisme」や、日本語の「抒情性」「リズム／リリズム」という語が持つ曖昧さや多義性を、可能な限り解きほぐし、その細かなニュアンスの違いを明確にし、また同時に、その違いが生まれた経緯についても随時考察を行いたい。

1. 抒情と叙情

議論の本題へと入る前に、まず「lyrisme」の日本語における訳語として「抒情性」という漢字を用いることを確認しておきたい。たとえば『プチ・ロワイヤル仏和辞典 第4版』(旺文社、2010年)などの仏和辞典においては、「lyrisme」の訳語として「叙情性」という表記のみが記されている。しかしながら、一般的な国語辞典においては、例えば『広辞苑 第7版』(岩波書店、2018年)などのように「抒情」と「叙情」

という2つの表記が併記されている場合、あるいは「抒情」のみが記載されている場合などもある。2つの表記に含まれる「抒」「叙」という漢字にはどのような違いがあるのだろうか。『大漢字林 初版』（大修館書店、1994年）では、次のように説明されている。

漢字	「抒」	「叙」
読み	ショ・ジョ	ジョ
意味	①のべる。思いをうちあける。「抒情」「抒懐」②ゆるめる。また、のびる。ゆるむ。③くむ。くみ取る。④さらえる。井戸などの底をさらえる。	①ついで。ついでる。㊦順序を定める。④官職や勲位を授ける。㊦ものごとが順序正しく行われる。②ついで。順序。次第。「叙次」③のべる。＝抒㊦順序立てて述べる。「叙述」④ありのままに述べる。「叙事」（後略） 【参考】抒の書き換えに用いることがある「抒情→叙情」

「のべる」という意味を持つ点において両者は共通しているものの、「抒」に「思いをうちあける」という意味があるのに対して、「叙」には「順序立てて述べる」という意味があり、その性質は大きく異なっている。「ジョ情詩」が感情を表すものである点において、前者を用いるのが適切であるのは明らかだろう。また、その反対に「ジョ事詩」が出来事を筋道にそって語るものであることから、こちらには後者の「叙」を用いるのが適切であるだろう。「抒情詩」と「叙事詩」の違いは、単にその対象とするものが「感情」なのか「出来事」なのかという違い、すなわち「情」と「事」の違いに還元されるものではなく、対象となっているものを「どのように表すのか」という違いにもある。それゆえに、「poésie lyrique / poésie épique」という対になるジャンルを表す日本語訳として、「抒情詩／叙事詩」という漢字の組み合わせを用いることは確かに理にかなっている。機械的に「叙」という一字をこの両者にあてはめるのでは無く、「抒」と「叙」という異なる漢字を使うことで、両者の間に存在する

のが対象の違いだけでなく、その表現方法の違いでもあることが意識できるわけである。

それにもかかわらず「叙情詩」という表記が用いられることが多いのは、単に「抒」という漢字が日本において定められている常用漢字からはずれており、一般的にはあまり用いられないからであるだろう。今野真二著『常用漢字の歴史 — 教育、国家、日本語』（中公新書、2015 年）によると、明治以降に国の機関によって制定された「漢字表」には、「常用漢字表」（臨時国語調査会、大正 12 年）、「標準漢字表」（国語審議会、昭和 17 年）、「当用漢字表」（同、昭和 21 年）、「常用漢字表」（同、昭和 56 年）、「改定常用漢字表」（文化審議会、平成 22 年）などがある。少なくとも、上記にあげた漢字表においてはいずれも「叙」あるいは旧字体の「敍」が含まれるのに対して、「抒」は一度たりとも含まれてはいない。「叙情性」という表記が用いられるのは、単にそのような常用漢字の制約により「抒」という漢字を用いることができないという事情によるものでしかない。

以上のことから、小学校の教科書など常用漢字の制約を守る必然性があるような例外を除き、「抒情詩」という表記を用いるのが、妥当であると結論付けたい。

2. 称賛／批判としての「lyrisme」

日本語における漢字表記の問題にひとまずの答えを出したところで、肝心の「lyrisme」というフランス語そのものの意味や語の歴史を確認しておきたい。『プチ・ロベール』（*Le Nouveau Petit Robert de la langue française*, SEJER, 2008 年）では「lyrisme」の語は以下のように説明されている。

1. (vieux) Style élevé et hardi de l'auteur inspiré (ode, poésie, sacré)
2. (moderne) Poésie, genre lyrique
3. (par extension) Mode d'expression évoquant la poésie lyrique.
4. (figure) Manière passionnée, poétique, de sentir, de vivre.

- 1（古）靈感を受けた著者による高尚かつ大胆な文体（オード、詩、聖歌）
- 2（現代）詩、ジャンルとしての抒情詩

3（広義）抒情詩を喚起させるような表現様式

4（比喩）情熱的で詩的な感じ方、生き方

上記の4つの項目の内、2番に関しては、そもそも「lyrisme」が派生した元である「(poésie) lyrique」とほぼ同じ意味にされており、「lyrisme」とは何かという説明になっていない。3番についても同様である。また4番については「passionnée」「poétique」という二つの形容詞を伴いつつも、比喩的に「感じ方、生き方」というあまりにも広く漠然とした意味で用いられ、もはや「詩的な (poétique)」や「ロマンチックな (romantique)」といった類義語との区別を失っているだろう。

このように、「lyrisme」という語は、19世紀の誕生後すぐに、もともとの用法を離れ、広義あるいは比喩的な意味で用いられるようになった結果、本来の「高尚かつ大胆な文体」という意味からは大幅に離れてしまっているのである。とはいえ、抒情詩を議論する上で我々が考慮すべき「lyrisme」の意味とは、本来の意味である1番の項目に他ならない。

そのような本来の意味としての「lyrisme」についてのもう少し詳しい解説の例として、『Trésor』(*Le Trésor de la Langue Française informatisé*, <http://www.atilf.fr/tlfi>)における「lyrisme」の項目の該当箇所を紹介しておこう。

2. a) Tendance poétique, et plus généralement artistique, privilégiant l'expression plus ou moins vive de la subjectivité ou de thèmes existentiels dans des formes exploitant les ressources du moyen d'expression utilisé par l'artiste (langage, peinture, etc.).

詩における、さらには広義においては芸術における傾向で、主観性や実存的な主題についての多かれ少なかれ生き生きとした表現を、芸術家によって用いられる表現手段（言語や絵画など）の可能性を探究した形式の中で表すことを重視する傾向。

このように、「lyrisme」は同じように個人の主観性の発露を重んじる「romantisme」の語とは異なり、奔放さではなく、表現手段の探究をその特徴の一つとしているとさ

れている。そのことは、この語が初めて使われた例とされている1829年のアルフレッド・ド・ヴィニーによる使用例においても既に表れている。シェークスピアのフランス語訳上演に関して述べる中で、ヴィニーは「lyrisme」を「歌(chant)」と結び付けるだけでなく、翻訳作業における推敲の過程にも重ね合わせている。

Il fallait pour les traduire détendre le vers alexandrin jusqu'à la négligence la plus familière (le récitatif), puis le remonter jusqu'au lyrisme le plus haut (le chant), c'est ce que j'ai tenté. (Alfred de Vigny, *Œuvres complètes*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1964, tome I, p. 291.)

それら(＝シェークスピアの詩句)を翻訳するためには、アレクサンドランの詩句を一度もつとも親しみやすい無造作な状態(レチタティーヴォ)にまで緩めたうえで、それを再び最も気高い抒情性(歌)へと組み立て直す必要があり、それこそが私が試みたことである。

「remonter」は「組み立てる」の意味以外にも「再び持ち上げる」の意味があり、「haut(高い)」の形容詞とともに、「lyrisme」を目指すべき崇高なものとして位置付けている。しかしながら、モルボワが前掲書で指摘しているように、そのような肯定的な意味で「lyrisme」が頻繁に用いられるようになるのは、むしろ20世紀初頭以降にアポリネールやルヴェルディ、ブルトンなどが詩作や批評の中で用いてからであり、19世紀中ごろから19世紀末に至るまで、この語は批判的なニュアンスで用いられることが多かったとされている。次の例は、モルボワも引用している19世紀中ごろの辞書における「lyrisme」についての記載である。

Élévation des pensées ; noblesse d'expressions. Le *lyrisme* est le côté poétique de la prose : ce sont les rubans roses et les fleurs bleues du style. (Nodier.) [...] Se prend quelquefois aussi en mauvaise part. Vous faites là du *lyrisme*, c. à d. de l'exagération. (Maurice La Châtre, *Nouveau Dictionnaire universel*, tome II, p. 540, « lyrisme », 1865-1870ⁱⁱ.)

思考の気高さ、表現の崇高さ。リズムは散文における詩的側面であり、文

体におけるバラ色のリボンや青色の花々である。時おり悪い意味で用いられることもあり、リリズムを行っていると言えば、誇張をしていると言うことになる。

上記の例では、まだ両義的な性質として「lyrisme」を捉えているが、次の例では、もはや排除すべきものとして扱われている。

Que le lyrisme soit un écueil dans les vers en général, c'est ce que l'on jugera plus tard ; mais ce qui est incontestable, c'est que dans la prose, le *lyrisme* est un défaut manifeste et une inconvenance. (Francis-Alphonse Wey, *Remarque sur la langue française au XIX^e siècle*, 1845, tome 2, p. 355ⁱⁱⁱ.)

韻文全般において抒情性が障害であるかどうかについては今後判断することとして、明白なのは、散文において抒情性が明らかな欠乏であり、不適切なものであるということである。（フランシス＝アルフォネーズ・ウェイ、『19世紀のフランス語についての考察』）

このように、「lyrisme」の語は詩人にとってはその作詩において目指すべき高みとみなされつつも、それ以外の散文を扱う作家らにとっては不必要なもの、余剰なものを表すものとして用いられるようになってしまったようである。モルボワはこの点について、「その誕生時から「リリズム」の語は、肯定的な意味と否定的な意味との間で引き裂かれていた^{iv}。」と述べている。

このような扱いをうけた一つの理由として、19世紀後半に流行した自然主義（*naturalisme*）の影響があるだろう。客観的、科学的方法による観察に基づき外的世界のあり方を正確に写し取ろうとする彼らにとっては、伝統的な抒情詩における感情の吐露は不要なものであり、散文においてそのようなものが混入することを嫌い、それを「lyrisme」の語により批判したのだと考えられる。

3. 日本における移入：リリズムとリシズム

そのようにしてフランス本国においては、肯定・否定の両方の文脈で用いられてき

た「lyrisme」の語であるが、日本においてはどのように受容されてきたのだろうか。日本におけるこの語の受容の特徴として、フランス語からの「リリズム」という表記ではなく、英語の「lyricism」から音を移した「リリシズム」の表記の方が一般的であるということに注目できる。全ての使用例を網羅的に調査することは難しいため、本稿では特に今日における知名度と影響力を考慮して、インターネット上で閲覧可能な文学作品を対象に「リリズム」および「リリシズム」の語を検索語として google 検索により調査を行った。ネット上に作品データがアップロードされている文学作品は、ネット上で閲覧できる自動生成された国語辞典の引用としても用いられることが多いため、その影響力はとりわけ大きい。調査の結果としては、岸田國士、萩原朔太郎、坂口安吾、太宰治の4名による例が見つかり、その大半は1920年代から1930年代にかけてのものであった。

まず紹介するのは岸田國士によるフランス文学批評の中での例であり、いずれもフランス語に近い「リリズム」の表記が用いられている。

「沈黙と閑語とに生彩あるイメージを与へ」簡素にして含蓄多き文体を渾然たるリリズムの域に押し進めた彼は、如何に「沈黙の価値」を識る日本の作家中にも、稀に見るべき「沈黙の利用」者であると云ひたい。（「武者小路氏のルナル観」[初出:1924年]『岸田國士全集』第9巻、評論編（二）、新潮社、1955年、141頁）

ポオル・フォールは自由劇場に対抗して芸術座を起し、詩劇の復興を宣言して、大いにリリズムのために気を吐かうとする。

（略）

その[ルナルの]韻律は、戯曲の本質としてユニックな魅力を具へてゐるのみならず、含蓄と余韻に富む言葉言葉は、現実のイメージを無限に拡大して、幽玄なリリズムの香りを伝へ、語らざる人生の相を凝視する作者の眼から、その禁慾主義的な吐息の陰に、深く沈んだ光を投げかけさせてゐる。

（略）

ただ、狂燥と愁訴の雰囲気包まれた愛慾の世界、道化た仮面の下を流れる

ほろ苦い涙の味が、独特なリズムとなつて一つの傑れた近代悲劇を形造る。
そこに、在来の写実劇には見られない「感情の高揚」がある。

（「フランス近代作家素描」〔初出：1925年〕『岸田國士全集』第9巻、評論編（二）、新潮社、1955年、41・43・46頁）

岸田國士はフランス文学の翻訳を多数手がけるなど、フランス語が堪能であったため、フランス語の「lyrisme」をもとにした「リズム」の表記を用いているのも当然のことと言えるだろう。劇作家を対象とした批評文という性質上、ここで用いられる「リズム」は本来の「抒情詩」における本質的特徴を示すものではなく、上述の『ブチ・ロベール』での4つの項目の3番目に近い、劇作品の中に見られる詩的情緒のような意味となっている。とはいえ、自然主義の隆盛していた時代であるにもかかわらず、この語が肯定的な意味で用いられている点にも注意しておきたい。

続いては、萩原朔太郎による批評の中での例である。ここでは英語の「lyricism」をもとにした「リリズム」の表記が用いられている。

蕪村は自ら号して「夜半亭蕪村」と言い、その詩句を「夜半楽」と称した。まことに彼の抒情詩のリリズムは、古き楽器の夜半に奏するセレネードで、侘しいオルゴールの音色に似ている。彼は芭蕉よりもなお悲しく、夜半に独り起きてさめざめと歎歎するような詩人であった。

（略）

しかしこうした俳句の中にも、芭蕉の詩情するリリズムの咏嘆がよく現われている。そしてこのリリズムは、解説的にくどくどと説明するよりは、こうした句の嘆息している言葉の音楽（声調の呼吸する抑揚感）によく現われている。つまり言えば、芭蕉俳句のポエジイは、全くその声調の節付けてる音楽の中に存しているのである。

（萩原朔太郎『郷愁の詩人 与謝蕪村』〔初出：1935～1936年〕岩波文庫、1988年、103・112頁）

萩原朔太郎は、蕪村と芭蕉という二大詩人を論じる中で「リリズム」の語を上

記の例以外にも繰り返し用い、それを楽器や音楽と結びつけることで、「lyrisme/lyricism」が本来持っている「詩句が持つ音楽性」や語源の「lyre（豎琴）」の意味を感じさせている。しかしながら、そこに「侘しいオルゴールの音色」や「さめざめと歎歎する」といった悲哀を込めるところが、フランスにおけるニュアンスとは異なる点である。

そのような日本独自の傾向は、次の坂口安吾、そして太宰治においてさらに色濃く表れている。まずは坂口安吾による「リリズム」の2例である。

この断片の内容をかいつまんで申しますと（然しこの断片の真実の価値は恐らく理知の至高のものが変形したただ一片の感傷でありリリズムなのですが）ある日なにかしといふ農民作家が芥川龍之介を訪ねてきて、自作の原稿を示しました。（「女占師の前にて」〔初出：1938年〕『坂口安吾全集』第2巻、筑摩書房、1996年、203頁）

然し、少年時代の夢のような落伍者、それからルノルマンのリリックな落伍者、それらの雰囲気的な落伍者と、私が現実には落ちこんだ落伍者とは違っていた。

私の身辺にリリズムはまつたくなかった。私の浪費精神を夢想家の甘さだと思うのは当たらない。貧乏を深刻がつたり、しかめつ面をして厳しい生き方などという方が甘つたれているのだと私は思う。貧乏を単に貧乏とみるなら、それに対処する方法はあるので、働いて金をもうければよい。単に食って生きるためなら必ず方法はあるもので、第一、飯が食えないなどというのは元来がだらしないことで、深刻でもなければ厳粛でもなく、馬鹿々々しいことである。貧乏自体のだらしないさや馬鹿さ加減が分らなければ文学などはやらぬことだ。

（坂口安吾『いずこへ』〔初出：1946年〕『坂口安吾全集』第4巻、筑摩書房、1998年、161頁）

前者では、「リリズム」が「一片の感傷」と並置され、後者では「少年時代の夢」や「夢想家の甘さ」と類似する表現として用いられている。前章で紹介した19世紀後半のフランスにおける批判的な用法とも異なるが、かといって肯定的なニュアンスで用い

られているわけでもない。成熟さや重厚さとの対比において、未成熟さ、繊細さを含むものとして「リリズム」が提示されている。

続いて、太宰治による3例である。太宰の場合には「リリズム」の表記が用いられている。

「ちえっ！ また御託宣か。——僕はあなたの小説を読んだことはないが、リリズムと、ウキツトと、ユウモアと、エピグラムと、ポオズと、そんなものを除き去つたら、跡になんにも残らぬやうな駄洒落小説をお書きになつてゐるやうな気がするのです。僕はあなたに精神を感じずに世間を感じる。芸術家の気品を感じずに、人間の胃腑を感じる。」

（太宰治『ダス・ゲマイネ』〔初出：1935年〕『太宰治全集』筑摩書房、第2巻、1998年、339頁）

「僕の作品なんかは、滅茶苦茶だけれど、しかし僕は、大望を抱いてゐるんだ。その大望が重すぎて、よろめいてゐるのが僕の現在のこの姿だ。君たちには、だらしない無智な薄汚い姿に見えるだらうが、しかし僕は本当の気品といふものを知つてゐる。松葉の形の干菓子を出したり、青磁の壺に水仙を投げ入れて見せたつて、僕はちつともそれを上品だとは思はない。成金趣味だよ、失敬だよ。本当の気品といふものは、真黒いどつしりした大きい岩に白菊一輪だ。土台に、むさい大きい岩が無くちや駄目なもんだ。それが本当の上品といふものだ。君たちなんか、まだ若いから、針金で支へられたカーネーションをコップに投げ入れたみたいなお女学生くさいリリズムを、芸術の気品だなんて思つてゐやがる。」

（太宰治『津軽』〔初出1944年〕『太宰治全集』筑摩書房、第8巻、1998年、51-52頁）

僕には、道化の華が理解できないのだと思つた。僕は太宰治に、ヴァイオリンのやうなせつなさを感じるのは、そのリリズムに於てであつた。太宰治の本質はそこにあるのだと、僕は思つてゐる。それが間違いであるといはれても、僕はなかなか、この考へを捨てまいと思つてゐる。リリズムの野を出でて、いばら

に裂かれた傷口に布をあてずに、あらはに、陽にさらしている、痛々しさを感じてならない。(太宰治『虚構の春』[初出 1936 年]『太宰治全集』筑摩書房、第2巻、1998 年、448 頁)

私小説的要素を含む韜晦な自己言及あるいは自己批判の中で、「リリズム」の語は、自己の長所でもあり欠点でもあるものとして提示されている。また、「女学生くさい」「せつなさ」といった表現を伴い、未成熟さを孕んでいる点は、坂口安吾による「リズム」の用法にも通じる。

このような坂口安吾と太宰治に見られる傾向が生み出された理由として、以下はあくまでも仮説に過ぎないが、19 世紀末から 20 世紀初めにかけて自然主義が隆盛した日本の文壇の中で、散文における不必要なものとしての詩的な要素を「リズム」あるいは「リリズム」の語で表し、そこから「レアリスム＝成熟した芸術」に対する「リズム＝青臭い感傷」というニュアンスがとりわけ日本においては高まったのではなかろうか。さらにはそのようなニュアンスとしての「リリズム」が定着したのは、上記の太宰治の作品による影響が少なくないと思われるが、この点についてはまたあらためて考察を行う必要があるだろう。

また、日本において最終的には「リズム」の表記ではなく「リリズム」の表記が定着することになったが、その理由として、単にフランス語よりも英語の影響力が日本において大きかったというだけでなく、「リズム」という表記を用いたフランス文学研究者や翻訳者による著作以上に、太宰治を初めとしたそれ以外の「リリズム」という英米系の表記を用いた文筆家の影響力が大きかったという可能性が指摘できるだろう。

4. 「-ism(e)」と「-icism(e)」

以上のように、日本では「抒情性」という漢字での訳語以外にも、1920 年代から既に「リズム」あるいは「リリズム」というカタカナ表記が用いられてきた。本稿においては、その内の僅かな例を確認しただけではあるが、「リズム／リリズム」の語が意味するところは、フランス語においてと同様に称賛・批判の両方のニュアンスを含みうるものであることが明らかになった。さらには、フランス語における意味の

両義性上に、日本語における「リリズム／リリズム」は幅広いニュアンスを含みうるものである点が浮かび上がってきた。

その理由の一つとして考えられるのは、カタカナ表記の揺らぎがしめしているように、フランス語の「lyrisme」だけでなく、英語を経由した「lyricism」の語の影響が加わっていることが挙げられるだろう。日本の近代詩への影響という点ではフランス語の影響も少なくないが、大学での講義、小説・批評の翻訳などを考慮すると、当時から日本社会全体に大きな影響力を持っていた英語の「リリズム（lyricism）」の語の影響力もまた大きかったと推測できる。

そこで、第2章で確認したフランス語の「lyrisme」と比較すべく、英語における「lyricism」の意味を『オックスフォード英語辞典 第2版』（*Oxford English Dictionary*, 1989年）で確認しておこう。

Lyricism [f. LYRIC + -ISM.] Lyric character or style; the pursuit or eulogy of the same; (with *pl.*), a lyrical expression or characteristic. *Occas.* (after F. *lyrisme*), affectation of high-flown sentiment or poetic enthusiasm.

抒情的な性格あるいは様式。またはその追及や称賛。抒情詩を思わせるような表現や特徴。【まれに】（フランス語の *lyrisme* より）高揚した感情や詩的な熱狂を装うこと。

このように「lyric（抒情詩／抒情的）」という語の派生語として定義されているのみで、その内実についての言及は乏しい。さらには、フランス語の「lyrisme」からの影響として、「affectation（装うこと、気取り）」という否定的なニュアンスが紹介されている。

ちなみに、同辞書においてはフランス語とほぼ同じ綴りの「lyrism」についても項目があるが、その定義は以下のような簡易なものに過ぎない。

Lyrysm [a. F. *lyrisme*, or ad. Gr. *λυρισμός* playing on the lyre, f. *λύρα* LYRE.] = LYRICISM. Also (*nonce-use*), lyrical performances, singing of songs.

そもそも他の多くの英語辞書においては、「lyrism」の項目は無く、「lyricism」の項目のみが記載されているだけであり、実質的には英語において「lyrism」の語がまれに使われることがあるとしても、多数派である「lyricism」の意味と同じものとして使用されていると考えられる。

それでは、フランス語における「lyrisme」と英語における「lyricism」とは、どのような理由により、異なる綴りと僅かではあるものの異なる意味とを持つようになったのだろうか。本稿においては、接尾辞「-ism(e)」の機能に注目し、語源的な観点からその理由を考察してみたい。

「-ism(e)」という接尾辞は近現代ヨーロッパ言語において非常に造語力（néologisme）の強い要素であり、様々な新語がこれにより作り出されてきた。この接尾辞の歴史は非常に古く、ラテン語、さらには古代ギリシャ語においても、この接尾辞を含む単語が多数存在している。その例をあげると、フランス語における「christianisme」（キリスト教）や「archaïsme」（古語法）は、それぞれ「christianismus, *χριστιανισμός*」、*archaismos, αρχαϊσμός*」とラテン語・ギリシャ語のころから既に存在していた単語である。その作り方は多くの場合、元となる概念を表す名詞にこの接尾辞を付けるというものだが、場合によっては名詞化した形容詞、または名詞並みに一般に定着した形容詞を土台としてこの接尾辞が付けられることもある。

いま問題としているフランス語の「lyrisme」と英語の「lyricism」の違いは、接尾辞「-ism(e)」の前に「-ic-」が加わっているという点である。このように接尾辞「-ism(e)」で作られている単語でフランス語・英語間に綴りの違いがある例はそれほど多くなく、むしろフランス語・英語ともに「-ic-」がある語、どちらにも「-ic-」が無い語を、それぞれ数多く見出すことができる。比較対象として、そのようなフランス語・英語の組み合わせを以下に挙げておきたい。

フランス語・英語ともに「-ic-」がある語	
フランス語	英語
cathol <u>i</u> cisme	cathol <u>i</u> cism
class <u>i</u> cisme	class <u>i</u> cism

critic <u>i</u> sme	critic <u>i</u> sm
stoic <u>i</u> sme	stoic <u>i</u> sm

この表において英仏ともに「-ic-」を間に挟むグループに含められている4つの単語は、誕生した時代は異なるものの、いずれも形容詞から作られたものであり、それぞれ「catholique/catholic」「classique/classic」「critique/critic」「stoïque/stoic」という形容詞に「-isme/-ism」が加えられ、フランス語の「que+i」が「qui」とならず、ラテン語などでは同じ「キ」という音を示し得る「ci」の綴りに置き換わることで作られている。元としている形容詞が、造語が行われた時点でのフランス語圏・英語圏において同じ意味で用いられていたため、新語においても意味に大きな違いは生まれていない。

英仏ともに「-ic-」が無い語	
フランス語	英語
fétichisme	fetishism
narcissisme	narcissism
néologisme	neologism
socialisme	socialism
communisme	communism
capitalisme	capitalism

その反対に、フランス語・英語どちらにおいても「-ic-」が含まれないグループの単語は、「fétiche/fetish」「narcisse/narcissus」「capital/capital」という名詞を元に作られているか、「social」「commune」という語末を「-ique/-ic」としない形容詞から作られている。この場合においても、新語の意味にはフランス語・英語の間で違いは生じない。そもそも、「socialisme/socialism」「capitalisme/capitalism」などの20世紀のイデオロギー対立の中心となった用語は、各言語の枠を超えた世界的なものであり、そこに各言語独自のニュアンスが付け加わることは起こりにくかった

だろう。

やはり問題となるのは、「lyrisme/lyricism」のように、フランス語・英語の間に綴りに違いがあり、主に英語において「-ic-」が加わっているような組み合わせである。そのように2つの綴りがフランス語・英語において存在している例は、「lyrisme/lyricism」以外にも複数の単語において見られる。なかでも使用頻度の高い単語として6例を次の表にまとめておく。

英のみに「-ic-」がある語	
フランス語	英語
académisme	academic <u>i</u> sm (academism)
archaïsme	archaic <u>i</u> sm (archaism)
eclectisme	eclect <u>i</u> cism
érotisme	erotic <u>i</u> sm
lyrisme	lyric <u>i</u> sm
romantisme (romantic <u>i</u> sm)	romantic <u>i</u> sm

上記の表に関して補足しておく、「伝統主義」などの意味で用いられるフランス語「académisme」は英語においては「academicism」と「-ic-」が加わっているが、「academism」の綴りも許容されている。その反対に、「古語、擬古主義」などの意味のフランス語「archaïsme」は、英語においても同じく「archaism」と綴られるが、「archaicism」の綴りも散見される。また、例外として、フランスにおいても初期のころにはスタンダールが「romanticisme」の語を用いているが、その後定着しなかった。

このようにフランス語・英語の組み合わせにおいて、英語にのみ「-ic-」が現れている理由として、フランス語の「académisme」「archaïsme」「eclectisme」は「académie」「arché-」「eclect-」に「-isme」が結びつくことで作られているが、英語の「academicism」「archaicism」「eclecticism」は、フランス語から流入した形容詞、あるいはそれが名詞化したものである「academic」「archaic」「eclectic」に「-ism」が結びつくことで作られている。その結果、例えばフランス語の「académisme」が「Académie」すなわちアカデミー・フランセーズの定める

規範を重んじることであるのに対して、英語の「academicism」からは、アカデミー・フランセーズとの直接の関連性は弱まり、「academic」なものの、すなわち「伝統的なもの、学問的なもの」を重んじることを指す、という僅かな意味の違いが生じている。とはいえ、表にある他の単語の「archaïsme/archaicism」「eclectisme/eclecticism」「érotisme/eroticism」などには、綴りの違いにもかかわらずフランス語・英語間で意味にほとんど違いはない。

また、上記のグループ内のフランス語の綴りにおける唯一の例外である「romanticisme」については、この新語の元となっている「romantic」という形容詞が、まず英語圏において生み出され、それが「romantique」としてフランス語圏に移入されたという通常とは逆の経緯があったことが関連していると考えられる。

以上のことをまとめると、フランス語・英語のどちらにおいても、「-ism(e)」の前に「-ic-」が含まれない単語は、もともと「-ique/-ic」を伴わない名詞や形容詞から作られているか、あるいは「-ique/-ic」の接尾辞によって作られた形容詞の語源である語幹に直接「-ism(e)」が付くことで作られたものであるのに対して、「-ism(e)」の前に「-ic-」が含まれる単語は、「-ique/-ic」の接尾辞によって作られた形容詞形、あるいはそれが名詞化したものを語幹として作られているという違いがある。この違いは、フランス語から英語への語彙の流入が、おもに「-ique/-ic」の接尾辞によって作られた形容詞の形で入り、その元になっている語幹のみでの単語が十分に英語圏において認知されなかったことが原因であると考えられる。英語において「lyric」が完全に名詞化し、もはや「-ique/-ic」により作られた形容詞としての役割を失っていることは、英語において「lyrical」という形容詞が別に存在することからもうかがわれる。

このことを踏まえて「lyrisme」と「lyricism」の違いについて考えると、英語圏においては、フランス語から流入した「(poésie) lyrique」という形容詞が、「lyric」としてそのみで抒情詩、あるいは詩そのものや現代では歌の歌詞を意味する名詞として独立して機能するようになり、その「lyric」に対して接尾辞の「-ism」が付与されることで、英語における「lyricism」という造語が作られたとみなすことができるだろう。それに対して、本来のフランス語においては「lyrique」が「lyre」を語幹として作られたものであるという認識が残っているため、「lyre+isme」としての「lyrisme」

には、「lyrique」的なものの根源を表そうとする役割が残されているのではないだろうか。

5. 「stoïsme / stoïcisme」による例証

前章で確認したように、現代の英語・フランス語においては「-ism(e)」「-icism(e)」という2種類の語が混在することはなく、多くの場合、そのどちらかの系統のみが存続し、もう片方の綴りが用いられることはほとんどない。しかしながら、過去において2種類の語が共存していた例も、ごく稀ではあるが確認できている。例えばアカデミー・フランセーズにより1798年に出版されたフランス語辞書第5版では、現代フランス語とは異なり、「stoïcisme」だけでなく「stoïsme」の項目が存在しており、ここでは「stoïsme」と「stoïcisme」の違いが下記のように説明されている。

STOÏSME. s. m. Qualité de ce qui est stoïque. *Le stoïsme de son langage, de sa contenance. Il y a la même différence de Stoïsme à Stoïcisme, que de Stoïque à Stoïcien*. (*Dictionnaire de L'Académie française, 5e édition, 1798.*)

ストイスム 【単数・男性名詞】 ストイックなものの性質。彼のことは、彼の態度のストイスム。ストイスムとストイシズムの間には、ストイックとストイシヤンの間にあるのと同様の違いがある。

ちなみに「stoïcisme」の項目は以下のように説明されている。

STOÏCISME. subst. m. Philosophie de Zénon. Fermeté, austérité, telle qu'étoit celles des Stoïciens. *C'est par pur stoïcisme qu'il vit ainsi.*

ストイシズム 【男性名詞】 ゼノンの哲学。ストア主義者たちのような揺るぎなさ、厳しさ。純粋なストイシズムによって彼はそのように生きた。

つまり、後者の「stoïcisme」が「ストア派」という固有名詞に関するものに限定されているのに対し、「stoïsme」は「ストア派」という一つの教義・集団に限定さ

れないものであると区別することができるだろう。また、「stoïsme」の項目において例として記されている「ストイスムとストイシスムの間には、ストイックとストイシヤンの間にあるのと同様の違いがある。」という文の対応関係を数式化すると「stoïsme : stoïcisme = stoïque : stoïcien」と表すことができるが、「stoïsme」と「stoïcisme」の違いを明確にするため、比較対象として提示されている「stoïque」と「stoïcien」が、同じ辞書の中でどのように定義されているかを確認しておこう。

STOÏQUE. adj. des 2 g. Qui tient de l'insensibilité et de la fermeté qu'affectoient les Stoïciens.

ストイックな 【形容詞・男女同形】 ストア主義者が希求していたような冷淡さと厳しさを保っているもの。

STOÏCIEN, IENNE. adjectif. Qui suit la doctrine de Zénon. *Philosophe Stoïcien*. Il se dit aussi Des choses, pour dire, Appartenant à la Doctrine de Zénon. *Opinion Stoïcienne. Maxime Stoïcienne*.

ストア主義の、ストア主義的 【形容詞】 ゼノンによる教義に従う者。ストア主義的哲学。事物についても言い、ゼノンの教義に属するような事物を指す。ストア主義的意見。ストア主義的金言。

2つの区別を端的にまとめると、前者の「stoïque」がストア主義という枠組みを必ずしも必要とはせずに「冷淡さと厳しさ」というその本質的特徴のみを問題としているのに対して、後者の「stoïcien」においてはストア主義であるという枠組みが絶対的な条件となっているとすることができるだろう。これを「stoïsme」と「stoïcisme」とに還元させて考えると、「stoïsme」がストア主義をストア主義たらしめているような核となる本質を指し示すのに対して、「stoïcisme」は「ストア主義であること」「ストア主義的／者であること」を示していると言えるだろう。

ただし、前述の通り、実際には現代フランス語の辞書には「stoïsme」の項目は無く、「stoïcisme」のみが収録されており、この項目が両方の意味を包含している。おそらくは、混乱を招きかねない2つの類似した語が、歴史の変遷の中で淘汰さ

れた結果、片方の表記のみが残り、ただしその意味においては双方の意味が残り、片方の表記の中に2つの僅かに異なる意味が並存することになったのだろう。とはいえ2つの表記の内のどちらが残るかは、どちらの意味の方がより重要であるかに影響されている可能性が高い。つまり、「stoïcisme」が生き残ったということは、「ストア主義の本質をなすような性質」という意味よりも、「ストア主義」そのものとしての意味の方が、フランス語が実際に書き言葉として、話し言葉として用いられる中で重要度が高かったと考えられる。

以上のようにして、「stoïsme」と「stoïcisme」を例に、「-isme」という接尾辞による造語作用の構造と、その歴史的な淘汰の過程について確認した。これを「lyrism(e)」[「lyricism(e)」]について当てはめて推論を行うと、「lyricism(e)」は「lyrique」というものが一つの既成概念として成立していることを前提とし、そのあり方を示すものであるのに対して、「lyrism(e)」は「lyrique」なものが所有あるいは希求しているような本質的を指し示しているとみなすことができるだろう。特に、英語圏における「lyric」は、ほとんど「詩」そのものと同じ意味で用いられているため、「lyricism」は「(散文作品における)詩情」という意味で使われていることが、以上のような語源的な推察からも導き出すことができるだろう。

6. 接尾辞「-ism(e)」の造語作用

このように「lyrisme/lyricism」が広範囲にわたる意味を持つことは、フランス語・英語間での双方向的な影響関係や、抒情詩というジャンルが持つ多様性に起因するところが大きいだろう。しかし、それ以外にも、「-ism(e)」という接尾辞が持つ意味の多様性によるところもあって少なくはないように思われる。

まず「-ism(e)」には、「capitalism(e) (資本主義)」や「socialism(e) (社会主義)」のように、〇〇主義という意味を形成する機能があり、特に20世紀初頭においてはこのような「-ism(e)」により作られた造語が多用され、そのことはポール・ヴァレリーも次のように述べている。

Il est impossible de penser — *sérieusement* — avec des mots comme Classicisme, Romantisme, Humanisme, Réalisme...

On ne s'enivre ni ne se désaltère avec des étiquettes de bouteilles.
(« Mauvaises pensées et autres », in Paul Valéry, *Œuvres*, tome II, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1960, p. 801.)

「古典主義」「ロマン主義」「人類主義」「写実主義」といった言葉を用いては思考を行うことは、真剣に言って、不可能である。

人はワインの瓶のラベルでは酔うことも無ければ、渴きを癒すこともない。

このように、20世紀初頭以降においては、イデオロギーの対立や様々な思想の台頭により、「-ism(e)」には「教義」から転じた「主義」という意味が定着していったが、19世紀までにはむしろそれ以外の多様な意味を付与する接尾辞として多く用いられてきた。その広がりには、「病理」（例：alcoolisme（アルコール中毒））、「行為」（例：gargarisme（うがい））、あるいは「行為によって産出されるもの」（例：néologisme（新語法））と多岐にわたっている。

なかでも最後に上げた「néologisme」の語は、時代とともにその意味も広がりを増し、もともとは「néologie」（新語法）から派生して「新語を用いることを好む精神」を表していたのが、「新語法」そのものの意味に置き換わり、さらには「新語法」によって作り出された「新語」自体をも指し示すようになったとされる。

そのような内面的傾向、行為、具現化されたものという一種の三位一体をなす「-ism(e)」の性質は、抒情詩というものとときわめて相性が良いように思われる。というのも、抒情詩というものは、詩人や聴衆・読者の心にも宿りつつ、詩を「詠う／聴く／読む」という行為そのものであり、同時にテキスト自体でもある。それゆえに、「lyrisme」という単語は、自動的にそのいずれの相においても成立し得ることになるだろう。これが、「lyrisme」というものを一言で言い表しにくくしている理由の一つであるように思われる。

さらに遡れば、「(poésie) lyrique」というジャンル自体、個人的感情の追求という内面性を持ちつつも、「豎琴 (lyre)」の伴奏をともなって歌われる、あるいは音楽性を喚起するような詩節の構造という外面性によっても定義されるという二重性によって成り立っているものである。それゆえに、そこから派生した「lyrisme」という語自体が、意味の多重性を背負っていることはむしろ当然のこととも言えるだろう。

7. おわりに

本稿における調査の結果からはまだ確実な結論を提示することはできないため、ここでは一つの仮定を述べるにとどめておきたい。日本語における「リリズム」の元になった英語の「lyricism」という語が、「lyric」というほぼ「詩」そのものを指すようになった言葉から派生し、その結果、散文の中に見出される余計なもの、過剰なものとしての詩的なものを表すのに対して、フランス語における「lyrisme」は「lyrique」という語の元になっている「lyre」の象徴性へと回帰し、「(poésie) lyrique」を「lyrique」たらしめている本質を示す言葉として用いられているといえるのではないだろうか。日本語における「リリズム」や英語における「lyricism」は詩に似たもの、あるいは詩を喚起させるものを指す言葉であるがゆえに、「詩」そのものを形容あるいは説明する際には用いられにくい。それに対して、フランス語における「lyrisme」の語は、この語を用いてきた詩人や批評家による配慮の結果、日本語や英語の場合とは異なり、抒情詩の本質を論じるための語という役割を保ち続けているように思われる。日本語や英語における「リリズム」「lyricism」の語に慣れ親しんでいる者にとっては、フランス語における「lyrisme」についての議論を理解する上で、そのような根本的な語の役割の違いを常に意識することが重要であるだろう。

また、本論において言及しながらも十分に検討することができなかった点として次の2点がある。一つには、日本での受容過程と、この語が定着していく中で各作家が果たした役割についてである。そして、もう一つには、フランス語・英語間での「lyrisme」と「lyricism」の語の双方向的な影響関係と、その中で英米文学の作家・詩人・批評家が果たした役割についてである。この2点については、また稿をあらためて検討を行うようにしたい。

参考文献：

抒情詩／抒情主体を主題とする論文集：

- *Figures du sujet lyrique*, sous la direction de Dominique Rabaté, Presses Universitaires de France, 1996.
- *Le Sujet lyrique en question*, Presses Universitaires de Bordeaux, « Modernité 8 », 1996.

抒情詩／抒情主体を主題（の一つ）とする論文、著書：

- BATTEUX Abbé, *Les Beaux-Arts réduits à un seul principe* [1746] ; rééd. par Jean-Rémy Manton, Auxamateurs de livres, 1989.
- BÉGUÉ Claude M., « A propos du “Voyageur”, quelques directions stylistiques de lecture », *la Revue des Lettres Modernes*, « Guillaume Apollinaire », 10, Minard, 1971.
- CHARLES-WURTZ Ludmila, *Poétique du sujet lyrique dans l'œuvre de Victor Hugo*, Champion, coll. « Romantisme et Modernités », 1998.
- CHARLES-WURTZ Ludmila, *La poésie lyrique*, Bréal, 2002.
- COLLOT Michel, « Un sujet lyrique hors de soi », in *Figures du sujet lyrique*, sous la direction de Dominique Rabaté, Presses Universitaires de France, 1996, pp. 113-125.
- COLLOT Michel, *Paysage et poésie — du romantisme à nos jours*, José Corti, 2005.
- COMBE Dominique, « La référence dédoublée : le sujet lyrique entre fiction et autobiographie », in *Figures du sujet lyrique*, sous la direction de Dominique Rabaté, Presses Universitaires de France, 1996, pp. 39-63.
- DAUVOIS Nathalie, *Le sujet lyrique à la Renaissance*, Presses Universitaires de France, 2000.
- GUERRERO Gustavo, *Poétique et poésie lyrique : essai sur la formation d'un genre*, traduit de l'espagnol par Anne-Joëlle Stéphan et l'auteur, Seuil, 2000.
- HAMBURGER Käte, *Logique des genres littéraires* [1977], traduit de l'allemand par Pierre Cadiot, Seuil, 1986.
- JACKSON John E., *La Question du moi*, Lausanne, A la Baconnière, 1978.
- JACKSON John E., *Passions du sujet : Essais sur les rapports entre psychanalyse et littérature*, Mercure de France, 1990.
- JARRETY Michel, « Sujet éthique, sujet lyrique », in *Figures du sujet lyrique*, sous la direction de Dominique Rabaté, Presses Universitaires de France, 1996, pp. 127-146.
- JARRETY Michel et alii., *La poésie française du Moyen Âge au XX^e siècle*, Presses Universitaires de France, 1997.
- JENNY Laurent, « Fiction du moi et figuration du moi », in *Figures du sujet lyrique*, sous la direction de Dominique Rabaté, Presses Universitaires de France, 1996, pp. 99-111.
- MAULPOIX Jean-Michel, *La voix d'Orphée : essai sur le lyrisme*, en lisant en écrivant, José Corti, 1989.
- MAULPOIX Jean-Michel, « La quatrième personne du singulier : esquisse de portrait du sujet lyrique moderne », in *Figures du sujet lyrique*, sous la direction de Dominique Rabaté, Presses Universitaires de France, 1996, pp. 147-160.
- MAULPOIX Jean-Michel, *du lyrisme*, José Corti, 2000.
- RABATÉ Dominique, « Énonciation poétique, énonciation lyrique », in *Figures du sujet lyrique*, sous la direction de Dominique Rabaté, Presses Universitaires de France, 1996, pp. 65-79.
- RABATÉ Dominique, *Poétique de la voix*, José Corti, coll. « Les Essais », 1999.
- RODRIGUEZ Antonio, *Le pacte lyrique : configuration discursive et interaction affective*, Mardaga, 2003.

- SERMET Joëlle de, « L'adresse lyrique », in *Figures du sujet lyrique*, sous la direction de Dominique Rabaté, Presses Universitaires de France, 1996, pp. 81-97.
- STIERLE Karlheinz, « Identité du discours et transgression lyrique », *Poétique*, n° 32, 1977, pp. 422-441.
- VADÉ Yves, « L'émergence du sujet lyrique à l'époque romantique », in *Figures du sujet lyrique*, sous la direction de Dominique Rabaté, Presses Universitaires de France, 1996, pp. 11-37.
- VADÉ Yves, « Hugocentrisme et diffraction du sujet », in *Le sujet lyrique en question*, « Modernité 8 », Presses Universitaires de Bordeaux, 1996, pp. 85-99.
- ZINK Michel, *La subjectivité littéraire*, Presses Universitaires de France, coll. « Écrivains », 1985.

注：

- i Jean-Michel Maulpoix, *du lyrisme*, p. 21.
- ii 2018 年 4 月 1 日次のサイトで閲覧 <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k50678k>
- iii 2018 年 4 月 1 日次のサイトで閲覧 <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k51016m>
- iv « Dès son apparition, le mot « lyrisme » se trouve partagé entre un sens positif et un sens négatif. » (*du lyrisme*, p. 31.)
- v 2018 年 4 月 1 日次のサイトで閲覧 <http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k504065>

The difference of nuance between French word “lyrisme” and English word “lyricism”

Daichi HIROTA

Abstract:

This research, focusing on the neologism effected by the suffix “ism(e)”, examines the subtle difference of nuance between French word “lyrisme” and English word “lyricism”, translated always without any distinction in Japanese as “Jojo-sei (抒情性)”. It aims also to clarify the historical circumstances in which was born the difference of nuance among French, English and Japanese. The French word “lyrisme”, coined in the early 19th century, is made by attaching the suffix “isme” to “lyre”, musical instrument which symbolizes traditionally the musicality of the poetry. On the other hand, the English word “lyricism” is created with “lyric” which originated from French “lyrique” but became soon to mean poetry itself or even word of the songs. With such morphological characteristics, the former is often used in discussing the essence in lyric poetry, while the latter is used rather to criticize the excess of poetic expressions or attitudes which are unnecessary in prose works. In addition, the Japanese word “ririsizumu (リリシズム)”, phonetic translation of “lyricism” introduced in Japanese vocabulary especially by the work of some Japanese writers in the early Showa era, has acquired some other nuances like affectation or immaturity.

Keywords: lyricism, French poetry, etymology, comparative study

キーワード：リリズム、リリシズム、抒情性、フランス詩、語源